

A・MUSEUM

vol.93
[2017. 12. 15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



顔に泥をつけたコハクチョウ



コウノトリ

冬の渡り鳥

博物館に隣接する菅生沼には、例年10月下旬から3月上旬にかけてコハクチョウが越冬のために飛来します。今年は10月20日に最初の個体が確認されました。コハクチョウの中には、全身が薄灰色をした幼鳥のほかに、顔から首を真っ黒にした個体を見かけることがあります。これは、頭を沼の中に入れてマコモという植物の根茎を食べたときにつけた泥化粧で、冬をたくましく生きるハクチョウたちの生活を垣間見させてくれる菅生沼の風物詩です。

昨冬はオナガガモやコガモなど毎年おなじみの冬鳥のほかに、菅生沼では初の記録となるハクガンや、野生下では絶滅し、現在は野生復帰が進められているコウノトリが飛来しました。この冬はどんな野鳥が訪れてくれるでしょうか。（教育課 後藤優介）

第71回
企画展

変形菌 -ふしぎ?かわいい!森の妖精-

Myxomycetes -Mysterious? Cute! Fairies of Forest-

次の企画展は変形菌が主役。でも変形菌ってなんだろう?おそらく大多数の人がそう思うでしょう。あるときは変形体とよばれる、鮮やかな色の巨大なアメーバとなってバクテリアを食べ、かと思えば一夜にして胞子がいっぱい詰まった高さ数mmの子実体に早変わり。私たちのもつ生きものの概念から飛び出したふしぎな生きもの、変形菌。今回はその変形菌にスポットを当てます。

-子実体の造形美-

変形菌の子実体は、種類によって実に多様な色彩、形を私たちに見せてくれます。黄、赤、茶、中には美しい金属光沢をもつものもあります。形を見ても、綿あめのようなものから、チョコバナナ、虫ピン、プレッツェルのように見えるものなどバラエティに富んでおり、数mmという大きさながら、驚くほど細やかなつくりをしています。まさに森の妖精ともよべるようなかわいらしさが変形菌の魅力のひとつです。子実体の造形美を感じられるような実物標本や写真を多数展示します。

-変形体から子実体へ たった一夜の大変身-

変形体は手のひら程の大きさから、ときには1㎡以上にも広がることもある巨大な単細胞です。変形体は時速数cmの速さで動きます。また、子孫を残すために子実体をつくりませんが、変形体から子実体への変化は短

時間かつダイナミックです。驚くべき大変身のような変形体の動きをとらえた映像を大画面で紹介しません。

-変形菌に魅せられた人々-

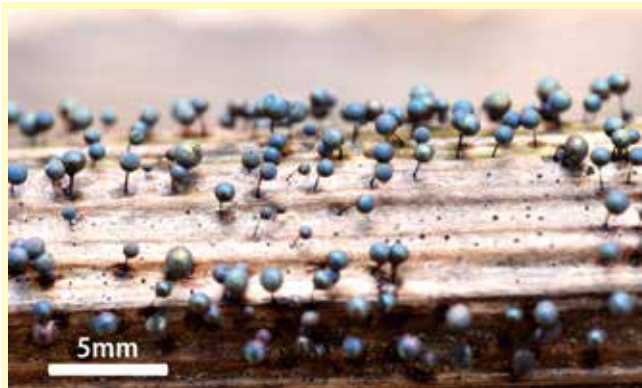
変形菌に魅せられて、その生態や造形美を追究する人々がたくさんいます。「知の巨人」として有名な南方熊楠や昭和天皇の変形菌研究はもちろん、変形菌のすがたをモチーフにした立体造形、絵画に表現するアーティスト、ファイナダー越しにミクロの世界をのぞき、変形菌の美しさをとらえる写真家など、変形菌と人とのさまざまな関わりを紹介します。

私たちの身近なところに生きているふしぎでかわいい変形菌。ぜひ企画展示室をご覧ください。

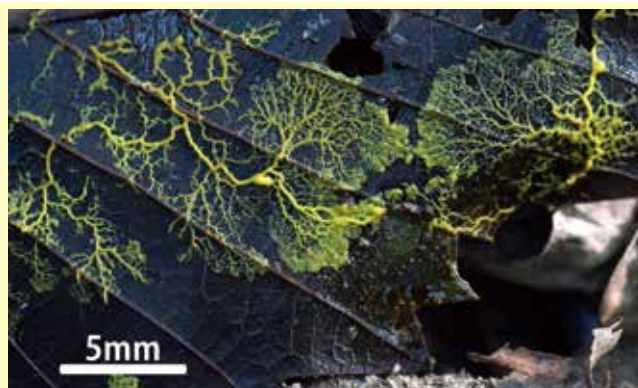
(資料課 宮本卓也)

展示構成

- 1 変形菌はどのような生きものか
- 2 変形菌とほかの生きものとの関わり
- 3 変形菌に魅せられた人々
- 4 変形菌とアート
- 5 変形菌と最新技術



金属光沢をもつリホコリのなかま



落ち葉の上の変形体



未熟なホソエノヌカホコリの子実体

会 期 2018年2月17日(土)から6月10日(日)まで

2月17日は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30~17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日

●自然講座 変形菌プレミアムトーク

日 時: 2月17日(土) 13:30~15:30

講 師: 萩原博光氏(国立科学博物館), 中垣俊之氏(北海道大学), 増井真那氏(日本変形菌研究会)

場 所: 博物館映像ホール

対 象: 小学生以上(小学生は保護者同伴)

定 員: 300名(事前申込み・先着順)

化石標本のつくり方

博物館の標本 3

博物館では多くの実物化石を見ることができます。しかし、化石はそのままのすがたで地層から見つかるわけではありません。多くの化石は岩石中に入り、余計な岩石を取り除かないと化石本来のすがたを見ることができません。今回は、化石の採集から展示までにどのようなことが行われるのかを紹介いたします。

①化石の採集：化石はタガネやハンマー、場合によっては重機を使って採集します。化石を傷つけないように、まわりの岩石ごと採集を行います。大型で破損の恐れのある化石は、麻布と石膏を用いた石膏ジャケットで保護し、採集します。なお、化石を採集するためには、土地の所有者に許可を取ることが必要です。

②化石のクリーニング：採集した化石は、まわりの岩石を取り除く「クリーニング」という作業を行います。タガネやコンクリート針、ハンマーを使って行いますが、ここで大切なのが、岩石中のどの部分に化石が入っているかを考えながら削っていくことです。誤って化石を傷つけてしまうと研究を行う上で支障が出てきます。博物館ではエアアチゼルという、空気を使って針を動かす機械を利用してクリーニングを行います。機械を使っても、数mm程度ずつしか削ることができません。クリーニングにもコツがあり、割れやすい面を見極めた



岩石中の化石

り、針の当て方を考えたりなど、経験を積むことでスムーズに進めることができます。

③調査研究、展示：クリーニングが終了した化石は、調査研究に活用されたり、博物館の展示に使用されたりします。ここではじめて、化石がみなさまの前に並ぶことになります。

このように、化石標本は採集からクリーニング、展示まで、大変な手間と時間がかかっています。博物館で化石を見る際は、その裏にたくさんの人の努力が隠れていることを思い浮かべていただければ幸いです。

(教育課 相田裕介)



化石のクリーニング



クリーニング後の化石

日本のヒスイの文化

ヒスイ(翡翠)を宝石として利用する文化は日本で生まれました。それは、約5千年前の縄文時代中期のことです。縄文時代のヒスイの宝飾品は細長い楕円形に穴が空いた形をしていて、大珠とよばれます。その後の弥生時代から古墳時代には、有名な勾玉の形が多く作られました。しかし、古墳時代以降、ヒスイの宝飾品は突然作られなくなります。おそらく金が大陸から運ばれて、仏教信仰もあり、

最も尊いものがヒスイから金に変わったためと思われます。中国のヒスイ文化は、ヒスイの産地であるミャンマーを侵略した後の18世紀にはじまり、日本より遙かに後の時代になりますが、ヒスイといえば長らく中国とされていました。日本にヒスイが産出することがわかったのは、ずっと後の昭和13年のことです。「日本の石」ヒスイを多くの人に知っていただけるように、1月2日と3日にイベント

館長コラム by director YOKOYAMA

を企画していますので、どうぞお楽しみに。



イラスト:小泉美絵(ミュージアムコンパニオン)

福島県いわき市の「首の短い首長竜」化石の研究

研究報告 1

首長竜くびながりゅうといえば、「恐竜時代の、長い首をもつ海の爬虫類ちゆうるい」を想像する人が多いのではないのでしょうか。日本で全身骨格が見つかったことで有名なフタバズクリュウなどは、エラスモサウルス類という、首長竜の中でも特に首が長いなかまに属します。しかし、首長竜のなかますべてが長い首をもっていたわけではありません。「首の短い首長竜」として、プリオサウルス類とポリコティルス類の2つのグループがあります。

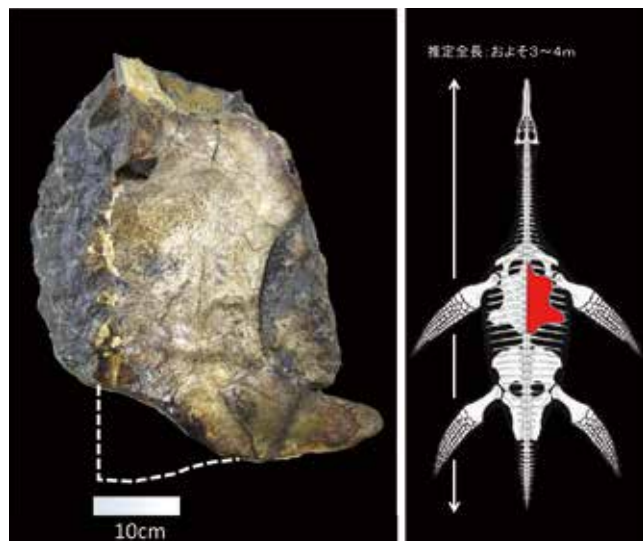
プリオサウルス類とポリコティルス類の化石は、日本での産出報告が少なく、日本近海における生息年代や生息範囲については、かなり限定的な情報しかありません。例えば、ポリコティルス類と確実に判断される化石はこれまで北海道からしか報告されていませんでした。しかし、福島県いわき市でもポリコティルス類かもしれない部分的な化石の報告もあり、ポリコティルス類の生息範囲がもっと広い可能性がありました。

私は、いわき自然史研究会の橋本一雄氏、松本武雄氏、鈴木千里氏、群馬県立自然史博物館の長谷川善和

氏、いわき市石炭化石館の菜花智氏、当館の国府田良樹めいよ名誉学芸員、茨城大学の安藤寿男氏と共同研究を行い、いわき自然史研究会の3氏が1982年に福島県いわき市で採集した化石が、ポリコティルス類ものであり、烏口骨くわこうこつという、首長竜の腹側に位置する肩の骨であることを確認しました。

この化石が発見されたのは、福島県いわき市に分布する双葉層群足沢層が露出する沢でした。双葉層群は下位から、足沢層、笠松層、玉山層の3つに分けられ、足沢層からはこれまでエラスモサウルス類とモササウルス類(首長竜とは別系統の海の爬虫類)の産出が知られていましたが、1本の歯化石について、ポリコティルス類かもしれないと報告されていました。今回の研究により、ポリコティルス類も足沢層が堆積した時期に生息していたとより確実に判断できるようになり、少なくとも3タイプの海生爬虫類(ポリコティルス類、エラスモサウルス類、モササウルス類)が当時の海における比較的大型の捕食者として、この地域に生息していたことがわかりました。

この研究については、2017年6月の日本古生物学会でポスター発表を行いました。(資料課 加藤太一)



(左)発見された首長竜の化石、(右)復元全身骨格(産出部位は赤色)
(O' Keefe and Chiappe (2011)を改変)



35年前に化石が発見されたいわき市の沢(右:橋本一雄氏)

モグラの家の掃除屋さん

モグラとキノコの共同生活。こんな話をみなさんは聞いたことがありますか？ナガエノスギタケというキノコは、モグラの糞から生えることが知られています。モグラは地下にトンネルを掘り、寝床やトイレなどの部屋を作っています。このモグラのトイレ掃除を、ナガエノスギタケが担当することがあります。モグラのトイレが糞でいっぱいになった後、ナガエノスギタケは糞を栄養にして地上までぐんぐん育ちます。

このときナガエノスギタケは、生きている木の根とも結びついて栄養をやりとりしながら成長します。これにより、糞が土に戻り、またモグラが生活できるきれいな環境に戻るのです。まるでナガエノスギタケは、モグラの家の掃除屋さんです。このようにナガエノスギタケは、モグラと助け合う興味深いキノコです。

みなさんも、ナガエノスギタケを探してみてください。地下ではきっとモグラの家の大掃除が行われて

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

いることでしょう。
(ミュージアムコンパニオン 小泉美絵)



ナガエノスギタケとモグラの家
(イラスト:小泉美絵)

ミヤコタナゴー天然記念物の外来種ー

研究報告 2

ミヤコタナゴは国の天然記念物に指定されている日本固有の小さな淡水魚です。マツカサガイなどの生きている二枚貝に産卵するというめずらしい習性があり、産卵の季節になるとオスには美しい婚姻色があらわれ、メスには産卵管とよばれる長い管が伸びてきます。かつては関東地方に広く分布していましたが、現在はごく限られた地域にしか生息していません。そのため、多くの人たちがミヤコタナゴを絶滅から救おうと努力をしています。

最近、このミヤコタナゴが茨城県と千葉県のごく限られた地域にしか生息していません。そのため、多くの人がミヤコタナゴを絶滅から救おうと努力をしています。最近、このミヤコタナゴが茨城県と千葉県のいくつかの場所で新たに発見されました。ミヤコタナゴは長い間、茨城県には生息していないと考えられていたため、このニュースに研究者は驚くと同時に、不審に思いました。「これらの生息地はどうして今まで見逃されていたのだろう」と。その謎を明らかにするため、さまざまな機関が参加した研究グループによる調査が行われ、当館もこの調査に参加しました。新たに発見されたミヤコタナゴの遺伝子を調べてみると、すべて千葉県南部に生息するミヤコタナゴと同じであることがわかりました。この結果は、千葉県南部のミヤコタナゴが、だれかの手によって茨城県や千葉県の別の地域に密放流されている可能性を示すものでした。

さらに昨年の8月にも茨城県のとある河川で釣り人から「ミヤコタナゴかもしれない魚が釣れた」という連絡があり、急いで確認に向かうとそこには間違いなくミヤコタナゴが、2匹もいたのです(写真)。ミヤコタナゴは本来、湧水の噴出するようなため池やそれに連なる細流、谷津田の最奥部の水路などを生息環境としています。しかし、この2匹が釣れた場所は大きな河川の水門付近であり、ミヤコタナゴの生息環境として適しているとはいえ、また、これまでミヤコタナゴがそういった場所に生息していたという情報もありません。状況的にみて密放流の可能性が高いと考えざるを得ませんでした。

得ませんでした。そして、その推測を裏付けるように、その後の調査では再びミヤコタナゴのすがたを確認することはできませんでした。

ミヤコタナゴを増やしたいというだけで、放流している人がいるのかもしれない。またインターネットなどでタナゴ類の繁殖に必要な装置やノウハウなどの情報を容易に得ることができるため、ミヤコタナゴを密かに飼育し増やしている愛好家もいるようです。しかし、許可なくミヤコタナゴを飼育したり、放流したりすることは法律で禁止されています。それに生息に適していない環境に放されても、生き残ることはできません。また、ミヤコタナゴは生息地によって色や形などの形質が異なることがわかっています。むやみに放流すると、遺伝子攪乱といって、別の地域のミヤコタナゴとの交配により、もともとその地域にいたミヤコタナゴの特徴が失われてしまいます。

たとえ天然記念物のミヤコタナゴであったとしても、地域性を無視して野外に放せば、生態系に悪影響をあたえてしまうのは、ほかの外来生物と同じです。それは多くの人たちがミヤコタナゴを守るために行った努力を無にしてしまう行為にほかなりません。

(資料課 土屋 勝)



茨城県内で捕獲されたミヤコタナゴ

サメ展～サメの赤ちゃん展示中～

みなさんの想像するサメはどんなものですか? 「凶暴で恐ろしい生物」というイメージをもつ方が多いと思います。

現在開催中のサメ展では、アクアワールド茨城県大洗水族館で繁殖したバリキャットシャーク、サンゴトラザメ、アラビアンカーペットシャークの赤ちゃんを展示しています。みなさんのサメのイメージを覆すような愛くるしさがあふれ、思わず「可愛い!」と一言出てしまうことぞ

よう。

この3種は夜行性のため、開館中は石の下に隠れ、身を寄せ合っていることが多いです。体の形や模様がそっくりなサメたちですが、わずかながら違いがあるので、ぜひ見比べてみてください。

現在展示しているのは生後5~6か月の赤ちゃんで、大人になると最大70cmほどまで成長します。企画展会期中もますます大きく育ちます。2度、3度とサメ展に足を運んでい

おさかな通信

ただき、飼育員と一緒に赤ちゃんの成長を見守っていきましょう。

(水系担当 濱野恭之)



バリキャットシャーク

光るキノコ

収蔵品紹介

今年の7月、光るキノコであるヤコウタケのなかまの標本がはじめて当館に収蔵されました。当館の総合調査の昆虫の調査員である佐々木泰弘氏と大輔氏の親子が、茨城県常陸太田市の西金砂山でホタルの調査中に発見したものです。さっそくキノコの専門家である千葉科学大学の糟谷大河氏と学生のみなさんとともに、佐々木氏の案内で西金砂山に調査に出かけました。日が落ちるのを待ち、真っ暗な中、懐中電灯を持って山に入ると、最初に光るキノコが発見された場所で地面がぼんやり青白く光っています。地面の落ち葉に這っている菌糸が光っていたのです。真っ暗な中しばらく付近を探すと、2cmほどの大きさの光るキノコを10個体ほど採集できました。暗闇の中で小さなキノコの光が浮かび上がるようすは、とても幻想的な光景でした。



西金砂山で発見された光るキノコ

糟谷氏が持ち帰り調べたところ、クヌギタケ属のヤコウタケによく似たキノコであることがわかりました。しかし、ヤコウタケと形態的に異なる点もあるため、DNA解析などの今後の詳しい調査が待たれます。光るクヌギタケ属のキノコは、茨城県内では目撃情報はあったものの、標本が採集されたのははじめてのことです。残念ながらこのキノコは生きているときにしか発光せず、標本では光が失われてしまうのですが、この貴重な標本は今後トピックスコーナーなどで展示する予定です。また、この調査結果は「茨城県常陸太田市で発見された発光性クヌギタケ属菌の分類学的検討」として、12月に発行される茨城県自然博物館研究報告に掲載されます。当館HPからPDFでも公開しますので、ぜひご覧ください。（企画課 鷗沢美穂子）



キノコを暗闇で撮影したようす

野菜と果物のちがいで？

なるほど博物館

このコーナーは、自然に関するさまざまな情報をわかりやすくお伝えするコーナーです。

野菜と果物の分類については、はっきりとした決まりはありません。国によって考え方もちがひ、日本国内でも考え方はひとつではありません。農林水産省では生産分野において、田畑に栽培され食卓で副食（おかず）となり、利用をするうえで加工を前提としない草本性の植物を野菜、樹木になり長年にわたり果実が収穫されるものを果物（果樹）として扱っています。したがって、草なのか、木なのかどうか野菜と果物を見分けるポイントのひとつといえます。

イチゴやメロン、スイカは果物コーナーで販売されていますが、それらは草本性であり、厳密には野菜に分類されます。しかし、甘味があり、デザートとして調理せずそのまま食べることが一般的であることから、「果物」として利用されており、「果実的野菜」とよばれることがあります。一方、果物といえるユズやスタチ、カボスなどは、調理用としての利用が多く、「野菜的果実」として、流通や販売などにおいて、野菜と一緒に扱われることが多いようです。

現在、平成30年度の秋に開催予定の企画展「果物展

（仮）」に向けて、果樹の花や葉を採集し、押し葉標本を作成しています。スーパーマーケットでは、食べる果実の部分のみが販売されていますが、実際に花が咲いているようすや果物が実る場面を見た経験は少ないのではないのでしょうか。形や大きさ、色、香りのちがひに見られる果物の多様性、また、果物と動物や人との関わりなど、果物の知られざる魅力をさまざまな視点からお伝えします。（資料課 豊島文夫）



リンゴの果実と花

トピックス

○アートとして蘇るペットボトル

生命にあふれる美しい珊瑚礁の海、その上を悠然と泳ぐ巨大なジンベエザメ。第70回企画展「サメ展 —ミュージアムパーク・コレクション—」では、LEDに照らされた幻想的なオブジェが来場者を出迎えます。この美しい作品が使用済みのペットボトルから作られていると聞けば、誰もが驚くのではないのでしょうか。

この作品を生み出したのは、ペットボトルアーティストの本間ますみ氏。今回のジンベエザメは全長5m、使用した材料は15Lのペットボトルに換算すると800本分にも達し、本間氏の作品の中でも最大のもです。本間氏は「アートであると同時に、再生可能な資源でもある」と、作品に塗料や接着剤は一切使いません。作品はすべてそのまま資源ゴミとして捨てることもできるそうです。模様を描いたり、ペットボトルを貼り合わせたりするには、はんだごてを使用しています。

ペットボトルでこれほど美しく神秘的な作品を制作する本間氏の技術と感性に感動するとともに、この作品がリサイクルを考えるきっかけになれば幸いです。

(資料課 土屋 勝)



本間ますみ氏作「ジンベエザメの泳ぐ海」

○TVでもおなじみの「恐竜くん」が、ミュージアムパークに登場！

11月18日(土)当館にて、一般社団法人坂東青年会議所と当館のコラボ企画として、恐竜研究家の恐竜くんをお招きし、「恐竜のふしぎ知ってる？—恐竜のすがたはコロコロ変わる？—図鑑だけじゃわからない恐竜のふしぎ—」と題したトークショーを開催しました。当日は冷たい小雨模様でしたが、249名の熱気あふれる恐竜好きの子どもたちと保護者の方々が参加しました。第1部「恐竜くんトークショー」では、恐竜くんがカナダ・アルバータ州で撮影した写真や自作のイラストなどを紹介し、子どもたちの目を釘付けにしています。第2部「夢にむかって—恐竜くんと加藤学芸員の質問コーナー—」では、恐竜くんと当館の加藤太一学芸員が、どんなきっかけで恐竜の研究をはじめたかなどを子どもたちに熱く語りかけました。子どもたちが

らは、「恐竜が生き延びていたら地球はどうなっていましたか？」など、予定時間をオーバーするほどたくさんの質問が出て、終了後に質問コーナーを特設しました。子どもたちの「ふしぎ、大好き！」に改めて驚かされたイベントとなりました。(企画課 山中久司)

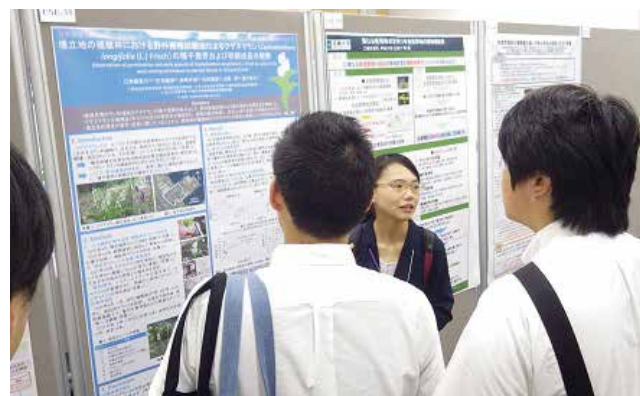


恐竜くん(左)と加藤太一学芸員(右)

○日本緑化工学会でポスター賞受賞！

調査研究や資料収集は博物館のベースとなる仕事で、展示や教育普及など、さまざまな活動を縁の下から支えています。当館の学芸系職員は各自の専門性を生かしたテーマに基づいて調査研究を行い、それらの成果は学会誌などの学術誌で発表されます。しかし、論文を作成し、学術誌に投稿して掲載が決まるまでには時間がかかります。そのため、学会で口頭やポスターで成果を発表するのが一般的です。学会発表では、自分の研究の評価を知るだけでなく、多くの研究者との交流を通して、研究に係わる有益な情報を得ることができます。

今年度の上半期、当館の職員による学会発表は、12ありました。その中で、特記すべきは、伊藤彩乃学芸員らが発表した「野外播種試験法によるクゲヌマラン (*Cephalanthera longifolia* (L.) Frisch) の種子発芽および初期成長の観察」(第48回日本緑化工学会、名古屋市、9月)が評価され、ポスター賞を受賞したことです。今後、成果を学会誌に投稿するだけでなく、研究で得られた発芽技術を茨城県内に生育する植物の保全に活かしていく予定です。(資料課 池澤広美)



第48回日本緑化工学会でポスター発表する伊藤彩乃学芸員

菅谷博名誉館長が社会教育功労者に選ばれました



受賞の報告に来館された菅谷名誉館長(後列右から4人目)と当館職員たち

当館の菅谷博名誉館長が、平成29年度社会教育功労者に選ばれました。これは、地域における社会教育活動を推進するため、多年にわたり社会教育の振興に功労のあった方を文部科学大臣が表彰するもので、本年は、菅谷名誉館長をはじめ、県内で2名の方が選ばれました。

菅谷名誉館長は、2005年6月、当館の初代館長をつとめた故中川志郎氏の後を引き継ぎ、第2代館長に就任され、2016年3月まで館長をつとめました。そして同年4月に、第3代となる横山一己館長にバトンを引き継いだ後は、名誉館長として引き続き当館を支えてくださっています。

菅谷名誉館長は、獣医学という自然科学分野の専門的知識もさることながら、多分野にわたる豊富な知見を生かし、当館の運営に尽力されました。菅谷名誉館長の指導のもと、茨城県の自然を世に広く紹介する多くの魅力ある企画展が開催されたほか、博物館に隣接す

る菅生沼の野焼きや清掃活動など地域の自然保護活動も積極的に行われました。また、県内外の大学や研究機関等と連携した総合調査研究等も継続され、茨城県の自然に関する知が博物館に蓄積され続けています。

2011年3月に発生した東日本大震災後には、菅谷名誉館長の指揮のもと、職員が一致団結し館の復旧と安全対策に取り組み、一時落ち込んだ入館者も、現在は回復し、増加傾向にあります。

今後も、菅谷名誉館長の心強い支援のもと、地域のみなさまに愛される博物館を目指してまいります。

(企画課 内方陽子)

編集後記

今年度のシリーズ連載は「博物館の標本」です。当館では現在、36万点ほどの標本を保管していて、展示されているのはそのごく一部です。展示をご覧になるときにその裏側のたくさんの標本たちに思いを馳せていただくと、また違った博物館の楽しみ方ができるかもしれません。(MU)

【交通案内】



●車ご利用の場合

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
圏央道坂東ICから25分

●鉄道・バスご利用の場合

- 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車徒歩5分

※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テ
ブル、椅子及びピ
ント等のお持ち込み
はご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設 のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注):()内は団体料金(20名以上)です。
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をご提示の方及び付添人(当該障害者等1人につき1人)は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

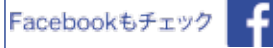
- 毎週月曜日
- ※12月28日(木)～1月1日(月)は休館となります。
- ※1月2日(火)、1月3日(水)は開館いたします。
- ※1月8日(月)、2月12日(月)は開館し、翌日が休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2017年12月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会
入会すると入館料が無料に! (年会費)

家族会員 4,000円 個人会員 3,000円
子ども会員 1,000円 賛助会員 10,000円
※特典 イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。